

平成二十二年十二月一日発行（毎月一回）日発行）通巻八五一号

火星

平成二十二年十二月号



七曜抄

(七)

山尾玉藻

鹿たちの古き世の貌水澄めり

足もとに水流れくる秋の昼

このごろの星夜に鮎の錆びゆける

皆去んでしまひし月の譜面台

出展の菊鉢もどりゐる日向
朝しぐれインクラインを遡る
夕近き茶の花を言ひ別れけり
茶の花へ筵の塵のきらきらと
綿虫に救命胴衣干されあり
綿虫にあり閘門の赤ランプ

(一部『俳句』十二月号より再掲)

太白星

柳生千枝子

国境ひ越えて時雨の虹となる
吊橋へ山男霧まとひくる
霧払ふ風が霧呼ぶ風となる
霧寒しアイスミルクの中に居り
月絶えて月光土を冷やしをり
げんまんの小指からめて木の实降る
椿の実踏んでしまひぬ狐雨

杉浦典子

馬小屋に馬のかほある月夜かな
城山の影より釣られ紅葉鮎

嘴のつつついで水澄みにけり
門柱にひと日逆さの枯蟻螂
牧の柵くぐり秋天眩みたる
水澄むやいまが晩年かも知れぬ
月白の滝壺ひかり溜めてをり

浜口高子

びんぼふかづら曳いて望月揺らしけり
銀漢や流人の島の船着場
シナトラ聞く頬杖いつか鉦叩
望の夜のアンティークの椅子軋みけり
肉炙る煙這ひけり虫の闇
自然薯の永平寺の土こぼれけり
括らるる猪に夕日のいつまでも

火星作品

山尾玉藻選

合戦図あふぐ色なき風の中
鹿垣に沿ふ水音の晴れわたり
たれかれの如来に座する秋の昼
おしろいに野鍛冶の水を捨てにけり
搾乳の灯に浮かみたる露の玉
竹伐つて雉の羽音を昏くせり
秋の蛇囃太鼓を遠くにす
一水のうごとと見えず蘆の花
水草に魚のかしづく良夜かな
満月の山へ傾く根釣り舟
橋の灯の定時に点る無月かな
萩すすき活けて九体寺の柱
燕去んで夕日まみれの朱雀門

宝塚蘭定かず子
明石戸栗末廣
八幡大山文子

初 鴨 の 水 に 疲 れ の あり に けり
稲 の 香 や こ の 頃 母 の 風 呂 嫌 ひ
赤 松 の 樹 皮 は が れ 落 つ 秋 土 用
野 分 あ と 水 の 音 す る 撫 の 芯
青 年 ら 豊 年 の 白 こ ろ が し 来
彼 岸 花 刈 る 落 ち 口 の ひ と と こ ろ
二 葉 菜 の 出 そ ろ ひ 列 の や や 曲 る
野 分 立 つ 豚 の し つ ぽ の 巻 き ぐ あ ひ
ぶ だ う 棚 に 二 百 十 日 の 没 日 あ り
水 の 辺 の 紙 敷 い て あ る 茸 籠
自 然 薯 の 穴 に 月 さ す 丹 波 口
片 照 り の ほ と け の 里 の 貝 割 菜
水 の 秋 ひ と も 佛 も 半 眼 に
露 の 地 へ 渡 す 解 の 歩 み 板
霧 し づ く し て 灯 の 漏 る 合 掌 家
髭 剃 つ て を れ ば 秋 冷 俄 な り
け ふ 薄 き 火 の 山 の 煙 つ ば め 去 ぬ

宝 塚 山 本 耀 子

大 和 郡 山 城 孝 子

枚 方 川 端 俊 雄

選のあとに

山尾 玉藻

合戦図あふぐ色なき風の中 蘭定かず子

季語「秋風」の本意は身にしむような寂寥感にある。しかし同じ秋風を指す季語「色なき風」には、その寂寥感に透徹した感覚が縊りこまれており、この微妙な感覚を一句に活かすのはなかなか難しい。掲句、「合戦図」は人間の哀しい業を容赦なく克明に描くものであり、それを仰ぎ見た作者のころは充分揺さぶられた筈である。しかし作者はそれには全く触れず「色なき風」に全てを託した。「色なき風」に感応した読み手のところに、寂寞の思いが深く染み入るばかりである。俳句における季語の絶対性を示唆するような一句である。

尚、恒星園作品に「天高し女戦ふ合戦図 高尾豊子」があったが、こちらの「合戦図」からは重々しい愴ましさなど微塵も感じられない。馬上の女武者か、薙刀を構えているのか、「女」の雄姿に明朗な美しささえ想像しえる。これもまた季語「天高し」の絶対的働きに因るものである。

竹伐つて雉の羽音を昏くせり 戸栗 末廣

竹が伐り出される音に敷の雉が驚いて飛び立ったのである。雉はそれなりに激しい羽音を立てたのだろうが、作者に

はそれが鈍い音に感じられた。「竹伐る」の候は竹の勢いが最も旺盛な時であり、そんな竹の性に負けて羽音が一瞬煙つたように感じられたのだろう。「〜して〜す」の因果的叙法が生きた。

萩すすき活けて九体寺の柱 大山 文子

九体寺（浄瑠璃寺）の本堂には阿弥陀如来九体が祀られている。一体一体の如来に堂前に板戸が設けられ、伽藍は横へ流れるような美しさを見る。「九体寺の柱」とは、横長の流麗な伽藍を彷彿させる表現であると同時に、九体の如来たちを象徴する表現でもある。自ずと、いま作者が直接まみえていない堂内の如来たちへ思いを馳せていることが知れる。また、何気なく活けてある「萩すすき」にこころを留め、この地の人々の純朴で慎み深い信仰心を思っているのだろう。

野分あと水の音する櫛の芯 山本 耀子

作者は「野分」が過ぎ去った後、「櫛」の樹に耳を近づけてみたのか、否、掌を当ててみたのだろうか。「櫛」はたっぷりと水分を含んだ樹であるが、「水の音する」とはややオーバーな表現とも思える。しかし、そう感じさせたのは「野分」の後の瑞々しい清爽感によって生じる五感の冴えであったのだろう。そう考えると、作者が櫛の樹に水音を感じたのはやはり掌であったのだろう。耳では当り前過ぎる。（以下略）

恒星圈

垣岡 暎子

生ビール飲むに大きな下足札
延び延びの子らの逗留百日紅
追ひこさぬやうに後ゆく夜の秋
ふるさととなりし疎開地盆の月
竹皮の一枚のこる残暑かな

大山 文子

加古 みちよ

耳元に翅音しきり南瓜畠
夕花野猫には猫の径のあり
帰るさの子規忌の白き月の舟
美濃近江分かてる山の花野かな
百舌高音風が背を押す柳生道

傘立てに傘一本の秋思かな
白雲にとどまる夕日九月なり
お手玉の柄撰ることも夜なべかな
母真似て運針をする夜なべの灯
止まれば先へ先へと秋の雲

岡 和 絵

金澤 明子

小面の唇すこしあく秋思かな
先生があやまつてゐる花野かな
逆さ吊りの薬草匂ふ盆のあと
物がみな影曳く夜のとろろ汁
搦手門にぎやかすぎる小鳥くる

百日紅ドレスリングが酸っぱくて
風を呼ぶ丈になりたる狗尾草
秋草に眉に日射の延び来たる
秋夕日明石の海に乗つてをり
雲は秋の潜々とゆく天守閣

獅子座

山尾玉藻推薦

涼野海音

虫籠に残れる草や明易き
改札の向うは海や今朝の秋
涼新た少しよごるる招き猫
向き合うて座れば水の澄みにけり

天谷翔子

花野より帰り来し夜の夢に母
九体仏の前赤かぼちや縞かぼちや
葡萄食ぶ一粒ごと指ぬぐひ
矢印の上を歩けと菊花展

伊勢きみこ

水平線まるき紀南の残暑かな
初風や羽あるもの流れゆき
ひいやりと二百十日の昼の風
大津絵の落雁を買ふ白露かな

松井倫子

水底に水噴き出づる秋の昼
豊年や醬油の香濃き裏通り
珈排の香れるヒュッテ鳥渡る
奥の院へ坂登りつぐ天狗茸

川端俊雄

だしぬけに嬰の泣きだす流灯会
露けしや地に傾ける笑ひ佛
宵闇や広げしままの歎異抄
筑波嶺に雲の笠ある夏の果

高橋芳子

大根時く早つづきの天仰ぎ
乾杯はノンアルコール虫の夜
稲を刈る香に一村の膨らめる
神殿に厄日の空のありにけり

松山直美

夜の秋のハーブの香る通し十間
酒蔵の梁つややかに昼の虫
秋灯の数増えてきし機上かな
月白の飛行デッキに待ち合はす